

ロールシャッハ・包括システムにおける反応数の多寡と特殊指標との関連について

～第2報～

滝澤毅矢 北里大学大学院医療系研究科 油谷元規 けやきの森病院 松本充彦 三木メンタルクリニック
加納信吾 クロスジョブ東京 石井雄吉 明星大学人文学部

キーワード：ロールシャッハ・反応数・特殊指標

I 問題

ロールシャッハ法（以下、Ror）において、反応数 Response Frequency（以下、R）の多寡がもたらす問題については、古くから様々な議論がなされてきている。Exner（2003/2009）の包括システム Comprehensive System（以下、CS）においても同様に、Rの多寡による解釈への影響について議論されてきたが、Exner（1992）は、「ロールシャッハ法ではノンパラメトリックな変数が多いため、偏相関解析、標準化、対数変換、換算点変換はRの問題への解決方法として不適切であり、ほとんどのデータがRの統制を経ずにそのまま分析可能である」と述べている。さらにExner（2003/2009）は、「Rを過度に統制する介入にはリスクが伴い、構造一覧表の中のいくつかの比率に影響を与えてしまう可能性がある」と述べている。

しかし、小西（1999）は、Rを高群と低群とにわけて各変数を比較した結果、領域と発達水準とに関する変数、決定因子、反応内容、組織化指標の頻度、形態水準、色彩刺激に対する反応など、多岐に渡る変数がRの多寡による影響を受けることを示唆している。このように、Rorの解釈におけるRの取り扱い、臨床家にとって依然として極めて大きな問題であるといえる。

特にCSに設けられており、解釈において重要な位置を占める6つの特殊指標である自殺の

可能性 Suicide Constellation（以下、S-CON）、知覚と思考の指標 Perceptual-Thinking Index（以下、PTI）、抑うつ指標 Depression Index（以下、DEPI）、対処力不全指標 Coping Deficit Index（以下、CDI）、警戒心過剰指標 Hyper vigilance Index（以下、HVI）、強迫スタイル指標 Obsessive Style Index（以下、OBS）は、その該当（陽性）判定が変数の出現頻度やRに対する出現率によって決定される。この特殊指標について、Meyer（1992）は、「Rの値が高くなることで特殊指標の下位項目への該当者が増加し、その場合における特殊指標の解釈には注意を要する」と述べている。したがって、解釈上きわめて重要な資料となる特殊指標に対して、Rとの関連を検討する必要があるといえる。そこで本研究では、Rの多寡と特殊指標との関連を検討することを目的とした。

II 方法

1. 研究参加者

大学・大学院生の男性57名（平均年齢21.98歳、SD=2.67、年齢範囲20～32歳）と女性81名（平均年齢21.99歳、SD=1.96、年齢範囲22～33歳）の合計138名（平均年齢21.98歳、SD=2.25）を研究参加者（以下、参加者）とした。

2. 倫理的配慮

研究への協力依頼にあたっては、匿名化された

データベースとして研究に利用されることを説明し、同意書への署名をもって承諾を得た。

3. 手続き

Rorの施行法並びにコーディングはExner(2003/2009)に準拠した。また、特殊指標並びに下位項目は、Exner(2003/2009)の陽性判定基準にしたがい「該当」、「非該当」に分類し名義尺度として扱った。なお、コーディングはCS施行歴15年以上の経験者を含めた2人以上の評定者の合議により採択した。

結果の処理にあたり、全参加者のうちRが高値及び低値の各25%に位置している参加者のプロトコルをR高群(以下、高群)及びR低群(以下、低群)として分類した。次に、高群と低群とにおける分類の妥当性をMann-WhitneyのU検定(以下、U検定)により確認した。そして、高群と低群とにおける各特殊指標及び各下位項目の比較は、該当者率(χ^2 検定)により行なった。なお、該当者率の比較において、度数が期待値に満たない各特殊指標及び各下位項目ではFisherの正確確率検定による正確有意確率を算出した。

III 結果

参加者の平均Rは27.0(SD=10.2, 中央=24, 最頻=19, 尖度=1.18, 歪度=1.25)であった。その高群(N=35)のR(平均=41.9, 中央=41, 最頻=37)と低群(N=35)のR(平均=17.5, 中央=18, 最頻=19)とをU検定により比較した結果、有意差を認めた($p<.001$)。

特殊指標の陽性該当者率について両群間で χ^2 検定による比較を行なった結果、DEPIとHVIにおいては高群の方が高く($p<.001$)、CDIにおいては低群の方が高かった($p<.05$) (表1)。

次に、各特殊指標の下位項目における該当者率について両群間で χ^2 検定による比較を行なった結果、S-CONをみると、 $FV+VF+V+FD>2$ ($p<.05$)、 $Zd<-3.5$ ($p<.05$)、 $X+<.70$ ($p<.001$)、 $S>3$ ($p<.001$)の4項目において

は高群の方が高く、 $P<3$ ($p<.001$)、 $Pure\ H<2$ ($p<.01$)、 $R<17$ ($p<.01$)の3項目においては該当者率は低群の方が高かった(表2)。

PTIをみると、 $R>16$ ($p<.001$)、 $M->1$ ($p<.001$)の2項目においては高群の方が高く、 $R<17$ ($p<.01$)の1項目においては低群の方が高かった(表3)。

DEPIをみると、 $FV+VF+V>0$ ($p<.05$)、 $FD>2$ ($p<.05$)、 $S>2$ ($p<.001$)、 $SumC'>2$ ($p<.05$)、 $2AB+(Art+Ay)>3$ ($p<.05$)の5項目においては高群の方が高く、低群で高かった項目はみられなかった(表4)。

CDIをみると、 $AdjD<0$ ($p<.001$)、 $Food>0$ ($p<.001$)の2項目においては高群の方が高く、 $EA<6$ ($p<.001$)、 $Weighted\ SumC$ (以下、 $WSumC$) <2.5 ($p<.05$)、 $PureH<2$ ($p<.01$)の3項目においては低群の方が高かった(表5)。

HVIをみると、 $Zf>12$ ($p<.001$)、 $S>3$ ($p<.001$)、 $H+(H)+Hd+(Hd)>6$ ($p<.001$)の3項目においては高群の方が高く、低群で高かった項目はみられず、さらに陽性となる上での必須項目である第1条件 $FT+TF+T=0$ においても有意差は認められなかった(表6)。

OBSをみると、 $Dd>3$ ($p<.001$)、 $Zf>12$ ($p<.001$)、①~④ ≥ 2 ($p<.001$)、①~⑤ ≥ 3 ($p<.001$)の4項目においては高群の方が高く、低群で高かった項目はみられなかった(表7)。

IV 考察

高群と低群との間で特殊指標の陽性該当者率を比較したところ、DEPI及びHVIにおいては高群の方が有意に高く、CDIにおいては低群の方が有意に高かった(表1)。しかし、滝澤ら(2014)では、CDIとRとに正の相関関係が認められ、一方、Meyer(1992)では、DEPIとHVIとにおける複数の下位変数でRとの関連性が認められたが、CDIとRとの関連性は認められなかった。したがって、特にRが高値を示すプロトコルに

における DEPI と HVI との陽性該当には、R の影響を配慮した慎重な解釈が求められることになる。しかし、滝澤ら（2014）は R と CDI とについて、一定以上の有意確率を示しながらも相関係数の低さにより、関連性への明言を避けている。このように、R と CDI との関連についてはさらなる検討が必要であろう。

そこでまず、CDI の下位項目についてみると、AdjD<0 及び Food>0 の 2 項目における該当者率は高群の方が高く、EA<6、WSumC<2.5 及び PureH<2 の 3 項目における該当者率は低群の方が高かった。

特殊指標の陽性該当基準では下位項目の該当基準を R の高低により分けていない。したがって、逆の場合もあるが、生起頻度に基づく変数が一定値より低いことを該当基準とする下位項目は、R が平均範囲未満であると R が平均範囲以上の場合に比して、該当基準を満たす可能性が高くなりやすい。本研究における CDI の結果をみても、低群では EA (SumM+WSumC)、WSumC や PureH が低い状態になっており、高群では Food が高い状態になっているように、生起頻度による変数が R と連動していることがわかる。

しかし、AdjD<0 の該当者率は高群の方が高くなっており、つまり、R が高いと AdjD は低い状態であるため、EA<6 や Food>0 のように R の多寡と正の関係をもつ変数と逆の機序になっている。そもそも AdjD は EA から Adjes を引いた数値である。Adjes は es (FM+m+SumC'+SumT+SumY+SumV) のうち、状況要因である m と SumY の影響を除外する修正を加えた平素のストレス状況を示す変数である。つまり、高群では慢性的なストレス関連変数が高くなっていることになる。特に、DEPI の下位項目である FV+VF+V>0 と SumC' >2 との該当者率は高群で高いことが示すように（表 4）、高群では SumV と SumC' が高くなっている。その結果、es (FM+m+SumC'+SumT+SumY+SumV)

と Adjes とが増加したために AdjD (EA-Adjes) が低下したと考えられる。

また、CDI の下位項目である「EA<6 or AdjD<0」のうち、AdjD<0 は既述のように高群で該当者率が有意に高かったが、EA<6 は低群で高かった（表 5）。つまり、この条件は高 R でも低 R でも該当することになる。そもそも、CDI が陽性であることは、社会適応の難しさを示し、感情の問題を引き起こしやすい状況を反映している（Exner, 2003）。ここで重要なのはこの CDI が反映する「社会環境に対する適応不全」という問題が心理的活動性の低い場合だけではなくその活動性高い場合にも起こりうるとうことである。

安達・石井（2015）は General Health Qestinnair28 項目版（以下、GHQ28）を大学生に施行した結果、GHQ28 日本版が標準化された当時に比して、大学生の平均得点がやや高くなっていることを指摘している。本研究において高群がストレス関連変数で高値を示したのもこの安達・石井（2015）の指摘と関連しているのかもしれない。

このようにみると、CDI は被検者の心理的特徴だけでなく R や対象者の年齢の影響を受けて陽性（偽陽性）となる可能性があり、臨床場面における被検者の心理的状態像を捉えるツールとして CDI を用いる場合には、これらの点を十分に考慮する必要があると考えられる。

一方、本研究への参加者は大学生と大学院生とであり、既述の GHQ28 から指摘される問題（安達・石井, 2015）に加え、Exner（2003）に示されている成人非患者（N=600）の記述統計と比べて、R の平均値が 1SD 高い集団という問題もある。このことが特殊指標や下位項目の反応に影響を及ぼしているとも考えられるため、本研究の結果を安易に一般化はできないであろう。

さらに、本研究では CDI に的を絞って R の高による影響を検討したところ、他の特殊指標において、該当・非該当という次元でみると差は生じな

くても、その下位項目の次元では複数の有意差が認められた。これについては未検討のままである。

文献

安達玲音奈・石井雄吉 (2015). GHQ (The General Health Questionnaire) 質問項目の再考～ α 係数およびI-T相関から～. 神奈川県精神医学会誌 No.65, in press

Exner, J. E. (1992). R in Rorschach research: A ghost revisited. *Journal of Personality Assessment*, 58(2), 245-251.

Exner, J. E. (2003). *The Rorschach A Comprehensive System Volume 1 Basic Foundations and Principles of Interpretation* (4th Edition). John Wiley & Sons, Inc. 中村紀子・野田昌道(監訳)(2009). *ロールシャッハ・テスト包括システムの基礎と解釈の原理*. 金剛出版.

Exner, J. E. (1995). *A Rorschach Workbook for the Comprehensive System*

(4th Edition). 中村紀子・西尾博行・津川律子(監訳)(2003). *ロールシャッハ・テストワークブック*. 金剛出版.

小西宏幸 (1999). 包括システムにおけるRの影響力, *ロールシャッハ法研究*, 3, 1-11.

Meyer, G. J. (1992). Response frequency Problems in the Rorschach: Clinical and research implications with suggestions for the future. *Journal of Personality Assessment*, 58(2), 231-244.

滝澤毅矢・油谷元規・松本充彦・加納信吾・石井雄吉・高橋 恵・宮岡 等(2014). *ロールシャッハ・包括システムにおける反応数の多寡と特殊指標との関連について*, 神奈川県精神医学会誌, 63, 17-22.

表1. 特殊指標における該当者率の比較

特殊指標	該当者数		χ^2 値 (df=1)	Fisher値
	R高群	R低群		
自殺の可能性 (Suicide Potential: S-CON)	0	1	1.014	1.000
知覚と思考の指標 (Perceptual-Thinking Index: PTI)	1	0	1.014	1.000
抑うつ指標 (Depression Index: DEPI)	19	4	14.570	***
対処力不全指標 (Coping Deficit Index: CDI)	8	17	5.040	*
警戒心過剰指標 (Hyper Vigilance Index: HVI)	20	5	14.000	***
強迫スタイル指標 (Obsessive Style Index: OBS)	3	0	3.134	0.239

N=70(高群=35,低群=35)

$p < .05 = *$, $p < .01 = **$, $p < .001 = ***$

表2. S-CON下位項目における該当者率の比較

下位項目	該当者数		χ^2 (df=1)	Fisher値
	R高群	R低群		
FV+VF+V+FD>2	14	5	5.851 *	
Col-Shd Bl>2				
3r+(2)/R<.31	24	22	0.254	
3r+(2)/R>.44	4	4	0.000	1.000
MOR>3	5	3	0.565	0.710
Zd>+3.5	9	8	0.078	
Zd<-3.5	12	4	5.185 *	
es>EA	17	7	6.341	
CF+C>FC	18	23	1.472	
X+%<.70	31	13	19.825 ***	
S>3	28	7	25.200 ***	
P<3	0	10	11.667	0.001
P>8	3	0	3.134	0.239
Pure H<2	2	12	8.929 **	
R<17	0	8	9.032	0.005
N=70(高群=35,低群=35)		$p<.05=*$, $p<.01=**$, $p<.001=***$		

表3. PTI下位項目における該当者率の比較

下位項目	該当者数		χ^2 (df=1)	Fisher値
	R高群	R低群		
XA%<.70 & WDA<.75	0	1	1.014	1.000
XA%<.70	6	1	3.968	0.106
WDA<.75	2	1	0.348	1.000
X-%>.29	4	1	1.938	0.356
LVL2>2 & FAB2>0	0	0		
LVL2>2	0	0		
FAB2>0	3	3	0.040	1.000
R<17 & WSum6>12	0	1	1.014	
R<17	0	8	9.032	0.005
WSum6>12	8	4	1.609	
R>16 & WSum6>17	4	1	1.938	0.356
R>16	35	27	9.032 **	
WSum6>17	4	1	1.938	0.356
M>1	12	0	14.483 ***	
X-%>.40	2	0	2.059	0.493
N=70(高群=35,低群=35)		$p<.05=*$, $p<.01=**$, $p<.001=***$		

表4. DEPI下位項目における該当者率の比較

下位項目	該当者数		χ^2 (df=1)	Fisher値
	R高群	R低群		
FV+VF+V>0	16	7	5.245 *	
FD>2	8	1	6.248	0.028
Col Shd Blends>0	0	0		
S>2	34	15	24.558 ***	
3r+(2)/R>.44 & Fr+rF=0	0	0		
3r+(2)/R>.44	4	4	0.000	1.000
Fr+rF=0	22	23	0.062	
3r+(2)/R<.33	27	25	0.299	
Afr <.46	12	20	3.684	
Blends <4	13	12	0.062	
SumShading > FM+m	5	6	0.108	
SumC' >2	13	5	4.786 *	
MOR >2	7	3	1.867	0.306
2AB+(Art+Ay) >3	9	2	5.285 *	
COP <2	25	25	0.000	
Isolate/R >.24	3	8	2.696	
N=70(高群=35,低群=35)		$p<.05=*$, $p<.01=***$, $p<.001=***$		

表5. CDI下位項目における該当者率の比較

下位項目	該当者数		χ^2 (df=1)	Fisher値
	R高群	R低群		
EA <6	3	19	16.970 ***	
AdjD <0	9	0	10.328	0.002
COP <2 & AG<2	22	25	0.583	
COP <2	25	26	0.072	
AG<2	32	34	1.061	0.614
Weighted Sum C <2.5	8	18	6.119 *	
Afr < .46	13	20	2.809	
Passive > Active+1	12	9	0.612	
Pure H <2	2	11	7.652 **	
Sum T>1	2	0	2.059	0.493
Isolate/R>.24	4	9	2.362	
Food>0	25	11	11.209 ***	
N=70(高群=35,低群=35)		$p<.05=*$, $p<.01=***$, $p<.001=***$		

表6. HVI下位項目における該当者率の比較

下位項目	該当者数		χ^2 (df=1)	Fisher値
	R高群	R低群		
FT+TF+T=0	26	30	1.429	
Zf>12	26	11	12.899	***
Zd>+3.5	9	8	0.078	
S>3	28	7	25.200	***
H+(H)+Hd+(Hd)>6	30	13	17.425	***
(H)+(A)+(Hd)+(Ad)>3	13	9	1.616	
H+A:Hd+Ad<4:1	27	19	4.947	
Cg>3	14	5	5.910	

N=70(高群=35,低群=35) $p<.05=*$, $p<.01=**$, $p<.001=***$

表7. OBS下位項目における該当者率の比較

下位項目	該当者数		χ^2 (df=1)	Fisher値
	R高群	R低群		
①Dd>3	35	12	34.255	***
②Zf>12	26	11	12.899	***
③Zd>+3.0	9	9	0.000	
④P>7	4	0	4.242	0.114
⑤FQ+>1	6	1	3.968	0.106
全て該当	1	0	1.014	1.000
①~④ \geq 2 & FQ+>3	2	0	2.059	0.493
①~④>=2	27	6	25.283	***
FQ+>3	2	0	2.059	0.493
①~⑤ \geq 3 & X+%>.89	0	0		
①~⑤ \geq 3	14	1	14.339	***
X+%>.89	0	0		
FQ+>3 & X+%>.89	0	0		
FQ+>3	2	0	2.059	0.493

N=70(高群=35,低群=35) $p<.05=*$, $p<.01=**$, $p<.001=***$

Relation between Response Frequency and Special Indices
with The Rorschach Comprehensive System : second report

TAKIZAWA, Takeya

Graduate School of Medical Science, Kitasato University

YUTANI, Motoki

Keyaki-No-Mori Hospital

MATUMOTO, Mitsuhiko

Miki Mental Clinic

KANO, Singo

CROSSJOB TOKYO

ISHII, Takayoshi

Department of Psychology, School of Humanities, Meisei University

Key Words : Rorschach, Response Frequency, Special Indices
